

三河アララギ

平成二十二年

七月号

第五十七卷 第七号



ニューヨーク日記(45) <http://www.copetin.com/blueshoe/>

BlueCat, Shoe Lady

Sunday, May 2, 2010

Blue Shoe Diaries



この何年かNYではグルメフードトラックが流行ってるの。何所に止まって店出すかは分からないの。タコストラックや餃子トラック、それからデザートトラックなどなど。水曜の昼は会社の近くによく餃子トラックが現れるのを楽しみにしています

今日は家の近くの蚤の市にフードトラックバザールがあるって聞いて凄く暑い中足を運んだは良かったんだけど。。。もの凄い行列!! 目当てにしていたグルメハンバーガーは結局待ちきれずお友達と涼しいレストランで違うグルメバーガー食べて来ました。おいしかったよ～ 蚤の市ではかわいいガラスのカップもゲット出来たからご機嫌!

It was the Hell' s Kitchen Food Truck Bazaar today. So I went to the flea market in this scorching weather looking forward to my BLT burger. I would' ve been very happy with Calexico' s tacos too. But apparently a lot of NYers thought the same thing. The lines at each food truck were huge. So much so that my friends and I couldn' t wait it out and decided to go to an air conditioned restaurant to have another fancy pants burger instead. Mission accomplished! Had a yummy burger today.

目次

第五十七卷第七号(通卷六七九号)

表紙カット(十葉) 今泉 由利

ニューヨーク日記(45) Blue Shoe(11)

感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓より」(四)

青葉の笛 白井 久吉(七)

十葉の花 青木 玉枝(十三)

著我の花 林 伊佐子(二四)

日本海 金津 文枝(一六)

ニーチェはいふ 北川 宏廸(二二)

男鹿半島 杉浦恵美子(二三)

田植 石黒 スエ(二五)

古備前 平松 裕子(二六)

ことよせ (三二)

物理学者と詩歌の世界(6) 一石(三六)

鎌田敬止という人(四十三) 鮫島 満(三八)

萬葉一葉(318) 今泉 忠芳(四〇)

「水魚のことから(114) 岡本八千代(四一)

ことのはスケッチ(379) 今泉 由利(四二)

和菓子街道(45) 平松 温子(四三)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定 (四四)

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

冷房はさもあらばあれつつかれつつ杜詩二三篇にはやく昼寝す

P
135

ひととせははやめぐり来る父の忌よふすまま白く張りかへにけり

P
136

歌集

一本の木

杉浦弘

澄みわたる空

ひとりでひとは うまれない

ひとりでひとは くらせない ひとのくらしに ほしいもーの

いつもえがおの おもいやり ひとのいのちは とうとしと

いまをいきよう おおらかに あおげばたかい おおぞらーに

わをかくとりの まうように すみわたるそらの さやけさよ

澄みわたる空

作詞 杉浦弘
作曲 杉浦道生

一

ひとりで人は
ひとりで人は
ひとの暮らしに
いつも笑顔の

生まれない
暮らせない
ほしいもの
思いやり

二

困ったときは
弱ったときは
ひとのこころの
どんなものにも

助け合い
支え合う
やさしさが
換えがたい

三

人の命は
今を生きよう
仰げば高い
輪をかく鳥の

尊しと
おおらかに
大空に
舞うように

澄みわたる空の

さやけさよ

淡々^{あは}と

蒲郡 岡本八千代

君消えてはや幾日かすぎゆきぬ淡々^{あは}と咲く朝の月見草

兄さまとある時お兄さんと呼びにつつ一つ家に居てかの釜の飯

淡々と朝にも昼にも夕べこそ咲きつぐあはれ月見草の花

今宵こそ宵待草を歌ひけれにほひほのかにわれにたゞよふ

ひとりのむこのカプチーノのほろにがさつひに消えにし君よいつこか

のど飴の包み破りてふふみたりまた読みはじめ「仰臥漫録」を

男の子生まれたりとふ知らせあり夏の初め^{ちうん}の爛々の朝

われもさへ曾孫を得たりわが心どうしたら良いかこうしたらよいのか

われに過ぐ^{ひと}一日一日のかなしけれいとほしきもまた東の間にして

黙々と絵を描く夫のうしろ姿部屋遠くよりみつめてゐたり

「青葉の笛」

新城 白井久吉

茶作りを止めてかれこれ十五年霜の恐れも聴くのみでよし
豊川の岸辺の岩に亀の子を見つけてうれし水を汲みつつ
やうやくに望み叶ひてこの春に医師となりたる君を称へむ
町や村は市となりたるも年毎に人口は減り荒地増えゆく
たしかなる記憶なけれど桜咲く頃に燕は来れりと思ふ
稲作をすべて人手に任すれば米を買ふより金がかかると
一枚の若葉を軽く口に当て葉笛を吹かむ「青葉の笛」を
種なしの枇杷を初めて知りたるも種なし枇杷は枇杷には非ず
余るほどある馬鈴薯や玉葱は取りて食ふべし時期早くとも
手遅れや手抜きは承知しながらも仕事の出来る幸せを言ふ

金星

東京 今泉 由利

一億五千万キロメートルを来しといふしみじみとして今朝の光りを

太陽の光の圧力帆を受けて宇宙ヨットに永遠のあり

銀河系二千億個の星々のそのひとつ星地球にゐたり

太陽系地球にもっとも近い星宵の明星めざして歩む

金星より来たりし光の淡き影伴ひをらむ私の影

「ゆうづつ」と清少納言は呼びたりき宵の明星輝やきはじむ

戦いは歴史となりぬ静もりぬ能仁寺に宵の明星

硫酸と二酸化炭素に覆はるる宵の明星清く輝やき

目に見えぬ僅かばかりの質量のニュートリノといつも一緒に

無心に

豊川 伊藤八重子

表札の文字面白き子の家に老いにやさしき手摺のありて

暗算の七たす八を試されつ神経内科にわれかしこまる

紫の苧環おだまきの花露の群緑満たせしわが娘らの庭

アスパラも春菊の葉も庭のもの娘の揚げたて天ぷらの膳

春の草に追はれ追はれつ土に坐る無心になれる草取りを好む

大粒の貝殻模様を見せ合ひつ春のあさを愛づる味噌汁

玄関の孔雀仙人掌の紅を数ふる華は一日ひとひのいのち

贈られし卒寿の夫の湯呑碗つつしみ戴く百歳までもと

インクの字薄れし母のハガキ見る影のごとくに働きて逝きし

久に逢ふふたりのはなし留どなく数ある中より花の絵二枚を

カーネーション

豊川 弓 谷 久 子

芝桜に庭彩どりて子の家の華やぎてをりゴールデンウイーク
腹立ちはノートの隅にひっそりと書いて治めむ慣ひとなりぬ

えのころと似たれど非なり迷ひつつ育てて穂の出しバニータール
うろうろと手持ち無沙汰の朝なり連休明けの新聞休刊日

カーネーションの小さき造花付きてをり子より届きし初夏のブラウス
深山より刈り取り来しと今年又香り深ぶか山の露届く

帰りたしと言はざる姉の枕辺に暫し語らふ常の如くに

顔馴染となりし仔蜥蜴ペチュニアの花の蔭より我を見詰むる

同世代生き来し者のみ分り合ふあの戦争と戦後のくらし

今日一日よければよしとして生きむ君の言葉を諾ひて聞く

草々の中

豊川 内藤 志げ

長き列深く傾く玉蜀黍荒ぶれ治まる今朝の北窓

常に通る草々の中の小判草きらりきらきら今日の発見

重みある菜切り庖丁研ぎながら関孫六良寿の作と知りたり

友よりの菜切庖丁は関の孫六今日は人参の葉を切り落す

県道に沿ひて一列何処までも砥鹿神社の祭りの日なり

「おやつよ」とアスパラガスのハウスの中へ祭りの寿司は在所の夫婦に

夕暮の風の靡の藪の下燕が頻りに宙返りする

ワイパーを強に回して凝し見る信号の青ぼんやりと見ゆ

竹藪の櫛の葉裏若みどり黒雲速し雨まだ降らず

芝の色緑に見えはじめ雨の中小雀何を啄みゐるや

風船葛

豊川 安藤 和代

三年間の氏子総代けふ終る幟のはためき安堵して聞く

少女等も獅子をかぶりて町内を回りまはりてびっしょりの汗

巖かに神殿へ行く白袴小柄な夫も行列の中

祭り終へ境内鎮もる錠しめし音の響きのその淋しさよ

「女性なら厨の歌が詠めますね」師のことば思ひて苺ジャム煮る

雨晴れて畠に立てば蚕豆の伸びてさはさは風に戦げり

蚕豆に油虫寄れば天道虫その天道虫を蛙が狙ふ

風にゆるる風船葛の可憐さを語りつ孫と三十粒を蒔く

風船葛の種子のハートに魅せられて孫も私も大好きな花

この年は藤の花房の小さきに寄り来る蜂の羽音の高し

十葉の花

伊丹 青木 玉枝

幾百の蝶かと思ゆる花水木白き一ひら二ひらを手に

満開の花水木の下コツコツと杖を頼りて夕光の径

墓参終へてわが故里の砂浜を裸足で歩むゆきつもどりつ

東の間を至福の刻と暫し立つ三河の海風わが頬を撫づ

何時迄も私の胸に夫はいて会ふ人優し故里の街

差し当たり不満なき身に時折りの淀める孤独いづこより来る

日射し延び何かいい事ありそうなさあ始めよう私の一日

歩くより遅き車を走らせて子の優しさに故里を過ぐ

ひとり旅なれど心は弾みゐるで最後となるやアララギの会へ

露地裏のブロッケンにひそと咲く白き十字の十葉の花

著莪の花

岡崎 林 伊 佐 子

裏山の杉下かげに自生する群れ咲く著莪の五月真盛り

散歩する山径に吹く若葉風とどかぬ高さに空木咲きをり

裏山に息長く啼く鶯の声を聞きゐる耳聴き夫は

風寒き夕べとなりて晩霜のくるにやあらむ五月の野菜

キャベツ葉の茂りが中に休らへる蝶の生まれしままの形態

山径を横切りて行く青大将くさに隠るるまでを見送る

放置畑にコスモス植ゑむと草むしるひそみし蛙がわれを見てゐる

獣らに荒らされ放置になる畑こころ残れど花は咲き継ぐ

竹落葉自在に風に遊びゐて土に戻らむ黄の葉もあらむ

農をせし頃に戻りし双の手の日焼けみてゐる昼の畑に

確かなり

春日井 清澤 範子

一日を最善尽し湯にひたる外は雨音確かなりズム

一日の片付け終り床に入る朝は小鳥が起してくれる

娘と吾と鉢に植ゑたるベゴニアは赤き花びら逞しく咲く

八王子神社は今日は賑はひて並びて順に柏手を打つ

三人の家族なりけり休日は少し遠出のサイクリングに

面接に頑張る娘を励ましぬ夜は静かに更けて行くなり

八王子神社へ願ひ詣で来て夫の白髪軽ろく刈るなり

庭にある蜜柑の若木に白き花一杯咲きぬ楽しみの増す

求人誌を取りに行く娘元気にて吾は雨音聞きて待ちゐる

日本海

島根 金津 文枝

日本海に沿ふ白き巨大な風車九台春風に廻る連休

風は少し冷たく青空を行く飛行機大山北壁残雪の上空

仁王堂公園牡丹桜の下連休に三男夫婦に導かれて来つ

石で造る仁王堂公園の食台松の木の椅子に座す手作り弁当うまし

牡丹桜の下で昼餉すれば人懐こいカラスとんとん近づいて来る

大山の青空市場蕨惚の芽薇筍も太く長い

坂道に来れば祐子さんは待ち手を繋ぎ下されし

広大な大山原野蔓に引掛り転びし所に太き長い蕨が

孫慎太郎お父さんになれたと無事安産電話に嬉しさと安堵す

三日月に寄添ふ如く金星が五月十六日夜の美しさ

奥三河より

豊橋 胃 甲 節 子

牟呂用水も田圃の中の側溝も豊かにさ走る奥三河よりの清流

大き虹大き大きい虹を見て此の黄昏時のわたしは幸福

戴きし山菜の名をはや忘れ初物天ぷらの味覚は嬉しい

小麦畑畦全体に杉菜は繁り小麦の色より瑞々みどり

忍冬の花咲きてゐる石垣を楽しみとして散歩に出づる

エゴの花今日は可憐に下向きに咲き満ちてゐる降り続く雨

若葉に降る雨をひねもす眺めゐて人の仕合せ不仕合せ問ふ

咳と痰多量の煙草吸ふ夫の検診を案じて息苦しく待つ

田の路を散歩して行く梨畑のやうやく結ぶ小さき小さき実

生きてゆく気力萎ゆるを自づから励ましにつつ起きる朝々

楽しみて

新城 半田うめ子

わが父の元屋敷にて栗の木を植ゑにし人の行方はいかに
幼子を二人残して美しきやさしき女人の行方分からず

真夜中に輝きてをり月の見ゆ杉林の上窓辺にうつりき

行き暮れて千種の森なり夜桜を眺めし日を夢に見るなり

徳定とくさだの叔母は常々種々の物吾の為にともちて来たりし

青々とそよぎをりしに大根草うらがれて早や花も散りたり

西川の川辺を歩く吾が好むなずなさがしつつ朝陽に向ひ

楽しみて眺めゐるなり西川の上を舞ひをり数羽のつばめ

今年又出で来たるなり西川の草むらの中にいたちの居りし

父の畑売りしその金若き等の楽しみとして使ひたりき

花水木

名古屋 近藤 映子

葉櫻のトンネル路を通り過ぎ地下鉄駅に今日は向ふよ

曇り日の続きし卯月も末となる吾は変わらず夫の元へと

わが夫は声も出せずに我左手を握りて離さぬこの一時を

昭和の日娘と共に夫のもと午後の時間をゆつくり過す

夜の更けて何故か眠けは去り行きてあれこれ夫の顔の浮びて

花水木真白き並木その中にピンクも有りて風のそよぎを

陽の光臯月の風にゆれ動く花水木の白は清々し

バス停に近寄るバスの窓ガラスササラッときさはる花水木

花水木白いところは花びらで無く「苞」^{ほう}なりと昔夫より聞く

我夫に此のカーネーションの事話せば握手の力長く続きぬ

電子レンジ

豊橋 伊与田広子

今年はシヨパン生誕二百年テレビにて見るピアノ演奏

キーシンとバレンボイムの演奏なりシヨパン生誕二百年記念

耳馴れし曲想なれど題名の分からぬままに聞き入りてをり

われも又ピアノ弾きたく思ひつつ日頃忙がし弾かずとなりぬ

豆煮るに腹切りすれば煮えたりと母よりわれは教へられをり

花豆をわれは煮をりぬ中々に腹切りなきなりひね豆なるに

豆煮るに電子レンジに入れて煮る目安の時間示されている

新しく買いたるレンジの説明書二百四十一種の料理法あり

電子レンジつまみ回せば順番に写真出づる押せば調理始む

韓国と北朝鮮の併合を促進するが平和と思ふ

ニーチェはいふ

東京 北川 宏 勉

ニーチェはいふ本能といふは知性なりと本能はわれらの命を救ふ
幸せとは自らの夢の実現に精一杯の責任を負ふこと

最大のうぬぼれとは何愛さるる価値ありと思ふひとりよがりよ
後悔と勇氣と氣負ひをないまぜてサラリーマン生活本日終はる

悪いけど妻の言葉に身構へて何んでもやるよと先に答へり

妻の目はマネキンの着る洋服に洋服が妻を呼び止めてゐる

夢を売る店は少なくなりにつけり本屋に並びし「少年」の付録

妻のゐぬあちらこちらに妻の影メモのとほりに家事をかたづく

かみさんはいつも元気で留守がいいと云ひつつわれは夕餉の準備

普天間は大変だねと上からの目線に馴れて問題を避く

棚田

豊橋 佐々木利幸

大腿が疼痛するこの夜も楽しまむポア口探偵をひたに読みつつ

完治よりも疼痛の軽減を目標して治療を続けむ膝関節症

疼痛がする膝関節症に苦しみたる母の晩年を思ひ出したり

大腿の疼痛を我は軽病なりと思ひながら日々を過ごし居り

携へるズームレンズの選択に今朝も迷ひ居り撮影実習に

大栗安に来たれる今日は巡りたり木村棚田もひぞれ桧其棚田も

農水省に棚田百選に選ばれ居り撮影をせむ木村棚田も

大栗安に来て撮影を楽しみたり我は大腿の疼痛に耐へつつ

五十年も続けたる柿の栽培を捨てむかと今日も苦慮して居り

次郎柿を栽培していく限界は既に過ぎたりと長女に云はれ居り

男鹿半島

蒲郡 杉浦恵美子

縁なき東北山中古き街この春二度目の桜見むとは

川沿ひの桜並木の木の下にババヘラアイスの行商おばちゃん

亡き友の故郷横手を訪ひたしと二十数年思ひ続ける

友の里横手の駅前人気なく焼きそば幟がはためいてゐる

歩けども人見当らぬ横手にてこの夜の宿り悔やみはじむる

さて今宵如何に長き夜過さむか淋しき街をひとり旅する

男鹿半島バスを待つ間に三河ナンバー二台通りぬこんなところで

向席の高校生が気になれり羽越本線旅の終りに

自治といふ言葉用ゐて席替へを子等に任せぬ彼らは三年

連休の明けて教室窓の外櫛の若葉零れるばかり

芍薬

豊川 堀川 勝子

亡き父が在すがごとく爛漫と今年の芍薬六輪咲きぬ

うす紅の八重の芍薬誰よりも見せたき父のすでに在さず

法衣姿の父を偲べば淡紅の八重の芍薬風に揺るるも

それぞれに向きて揺れゐる芍薬のその花かげに私と母と

紫の都忘れを植ゑたれど淡色ばかり何故か咲きつぐ

天候不順日照不足をかこちつつ瓜蒔く時期には瓜の種蒔く

真白なサンゴの破片に耳を寄す遙かな海の波音きこゆ

茶臼山の展望台の前方遙か雪をいたたく北岳が見ゆ

桜すぎバイケイソウの若葉映ゆ山の湖畔の斜面なだりのあたり

三十万株の芝桜より成る「天空回廊」麓のトチ餅買ひ忘れたり

田植

豊川 石黒スエ

朝より始め二軒の田植を済ませたり早々の夕食声のはづみぬ

一本の苗も植ゑずに田植すみ一人前に安堵いたして

田植時昔は水に難儀せし今は何時にても水満てり

廣き田も二時間後には青田なり時代変りて楽になりたり

氏神様田植の濟みし御礼を念入り頭を下げたり今朝は

昨日まで水田なりし後田も今日は早くも青々早苗田

青田なる田面を眺め思ふなり病氣出でずに収穫するまで

田植すみ一週間目早苗田も早や白根を出だしをり

田植後も天気にくぐまれ根付よく早苗早くも白根出だして

田植後も天気にくぐまれ根付き良く苗もしつかとピンと立ちをり

古備前

豊川 平松 裕子

若き日は深刻ぶりし我なりき難しきことなく生きゐる今は

塵取りに数多のバラの花びらを掃き寄する朝雨は上がりぬ

家々の屋根の向かふに沈みゆく夕陽見せむと幼抱き上ぐ

鮮やかに今沈みゆく夕陽見す幼はたどきれいと言ひぬ

静誠様より頂きて来し日のままの丈のライラックに花は咲きたり

古備前の小さき角の徳利にと白と赤とのアスチルベ手折る

生前の父の棚より持ち出しし古備前の小さき角のとっくり

母の日なれば来たよと言へば父もまたさう言つて来たと母は言ひたり

着るものはパジャマだけなりその他は何も要らない母となりたり

焦る心持ちつつ真昼の庭に出で草木にたつぷり水を撒きをり

石楠花

豊川 小野可南子

菩提樹の若き緑葉はればれと寿恵先生に逢ひたる思ひ

嫁と娘と二つの花の窓の辺に五月の光明るくさしぬ

写生をと常言ひましき先生の色紙の前に思ひあらたに

常々に写生をせよ継続をと説かれし先生の笑顔のお写真

鬼ガワラ見られぬ家々続くところ新一年生を送ってきたり

来年もこの花見たしと願はれきあなたの石楠花このくれないの花

庭木々のみどり葉揺るる揺れざるも風吹き通る五月の風の

重々き広辞苑を繰りあつつ厚きレンズのルーペをたより

音羽川は今夕潮のとき洗ひ堰に小鷺カルガモ鳴とコチドリ

中洲なる葦の群生そを揺らし潜み囀るをヨシキリと聞く

五寸人参

豊川 山口千恵子

最低限必要な物は如何ほどか冬の衣服を片付けろつつ

忽ちに花終りたる藤波に小さき莢実はやみゆるなり

植ゑ替へて今年は花を待つ鉢に細く尖りし茶碗蓮の芽

庭隅にこぞるみどりの尖り芽は毎年勢ふ紫蘭の一群

古莖を少し離りて出でてをり黒ぐる強し皇帝ダリアの芽

金時なる薯蔓やうやく挿し終へて夕映え明るき麦秋の道

粒ふたつときをり飲むのを忘れつつテーブルの上の健康補助食品

サボテンの朱き花咲き萎みつつ去年と変はらず夏の近付く

混み合へるみどりの列を間引きする勢ひ増しきぬ五寸人参

間引きせし瑞々みどりのその先に朱色鮮やか小さき人参

東歌(1) (真間)

豊川 夏目勝弘

西よりの雨の予報に蒲生野を東国真間ままに変更したり

赤人が詠みし手児てこな奈は神となり安産子育て助けてをりぬ

池の辺に芽吹き初めし柳の細枝二羽のヒヨドリ静かに止る

成田への銀の機体のががやけり手児奈のみ堂は風音もなし

甲羅ほす亀のみ見ゆる池の面おも赤きまる葉のハスの点点

朝夕に手児奈くみにしみ井のこる平成乙女が素通りしてゆく

欄干の赤さやかなる継橋つぎはしを平成乙女が靴音ひびかす

三四歩行けば渡れる継橋のいと遠からむ恋ひこふ思ひ

防人さきもりは半農半漁の真間の民街ゆく人に面影を追ふ

打ち寄する波音聞こえし真間の里東京湾は七キロの先

「招待」

短歌の断片

東京 秋山逸穂

畦道に水の流るる音聞こえ風は早苗にたわむれている
雪とけて芽吹きを山を歩みつ草笛の音ながれいるなり
心地よくゆるる電車の居眠りは高尾へむかう危険な道程
紅茶の葉ポットのなかにて舞うようにゆつくりひらき香りたちゆく
無気力に無為な時間費やす日それでも浮ぶ短歌の断片

雨の日

東京 井村喬泉

尻あかく灯し染めたる自動車の数珠連なりに我もくははる
ワイパーのぬぐう雨つぶ目に障るものをこまめに除きてくれをり
信号と同じ色せしかたまりが雨降る夜のレーンに点る
門前に股を開きて台にゐる狛犬のペニスはともにもうへ向く
遠くから見ゆれば垂直にたるる蔦にも小さな屈折があり

贈呈誌 五月号

「群山」

依田栄子

「青森アララギ」

渡辺麻子

鳥の影窓よぎりゆく昼下り此の時の間はわれだけのもの

「リゲル」 吉野貞子

「愛媛アララギ」

大前隆宣

同じ事言ふも聞くもお互ひに長く生き来し証と思はむ

冬の池小石一つ落としては広がる水輪を吾は見ている

〔小・中・高秀逸作〕

「鹿児島アララギ」

廣津ノブ子

小六 佐久間薫

足冷ゆる夜は起き出でて湯に割りし梅焼酎を少しいたたく

力こめドッチボールで投げ合つて友と別れるさびしさ飛ばす

「高知アララギ」

都築初代

中二 河原華子

芝の上に動かぬ鳥と窓際の吾のひとときしとどふる雨

キラキラと光っているから手がのびる夏の星空稽古の帰り

「滋賀アララギ」

月澤純子

高一 太田叶

早春の今日は晴れたり我が足にて肌布団運びて竿にひろげぬ

階段を一つとばしで駆け降りる校門で待つあなたに会いに

「灯」

谷島洋子

歌集「日盛りの街」

大塚亮子

伊予柑と八朔区別のつかぬ夫それでも上手に皮剥きくれし

明かり消え音なき工場に動かざる機械は巨き鉄の塊

「冬蕾」

岡田ミヤ

五輪塔の巡りに生ふる十葉を揺らし二匹の蜥蜴這ひ出す

「柊」

牧田和枝

大仏の背に開く小さき明り取り冬の青空方形に見す

道の雪ようやく消えてポストまで行きしのみにて今日の日暮れぬ

直線になる所ある地下鉄の空いた車内に五輛を見通す

「榎の木」

井上摂子

烏瓜の花にやうやく出合ひたり夕闇迫る夏草の上

手袋をしつかりはめて傘を持ち病院行のバスを待ちをり

人は逝き時は茫茫金繕ひされたる「ととやの茶碗」が遺る

『いつとよせ』

「俳句」

紫荊集はなすあつ団登校のランドセル

植村公女

しょうぶ湯のしょうぶ鳴らして終りけり

桐の花背のびしている婆ふたり

蔓巻いて対称性を破りをり

一石

その先は時空の果てや木下闇

すかんぽを噛んで過去てふ時に遭ふ

中千本見下ろしてをり花の宿

佐藤喜仙

夕されば白花水木乙女のごと

永き日や大き鍔持つ婦人帽

我が庭に野イチゴ実り野となれり

皓一

マツゼミのここのみ鳴けり山の中

濃淡の幾重の山の万緑や

第二十五回蒲郡俊成短歌大会に於いて

入賞

○あらかしき年となりたる空仰ぐあふぎあるほどに増しゆく星星
(三河アララギ)小野可南子

入賞

○張り替へし障子の白さ嬉しくてただ嬉しくて一日暮れたり
鈴木つや子

奨励賞

○春浅きしづけき今朝に聞こえる長々ひくき船の霧笛
(いーはとぶ)三田美奈子

投稿

○中学生になりてゆきたるわが生徒らひとり我のみここ教室に
伊藤晴江

○地響きに地鳴り地揺れ山動く我等の力の何と無力ぞ
大阪 伊藤忠男

○はるばると黄砂は来たり日差し隠す昔の浪漫の今は何処に

○雨上がり水玉を乗す新緑の木の葉に静か日差しのとどく

○無数とはこういふことか川土手を埋め尽くしたり土筆つくし
豊川 白井信昭

○新緑の山のトンネルの暗がりに新幹線はぐんぐんと入る

○三河湾埋めたて地区の広これり遠ざかりたる里浜広し

二〇一〇年編纂 現代学生百人一首 東洋大学(抜粋)

○おばあちゃんこれが高校の制服だ勇んで見せる春の墓の前

県立青森中央高等学校一年

奈良岡貴大

○ブカブカの制服を着てはや二年思い出つまりちようどよくなる

福島県立田村高等学校二年

関根拓馬

○炭酸ののどごしほどのいい刺激君がいるから感じる毎日

埼玉県立久喜北陽高等学校一年

山口美由紀

○入試の時緊張してた教室が今では一番落ちつく居場所

埼玉県立松山女子高等学校一年

星君枝

○台風が去った後には水たまり僕と夕焼け静かに映す

千葉県芝浦工業大学柏中学校二年

野口雅哉

○流行のインフルエンザ対策は彼とつないだ手も洗わなきや

千葉県立市川西高等学校三年

小川舞子

○人込みのホームで感じるむなしさを父は何回味わっただろう

千葉県立市川東高等学校三年

佐藤樹里

物理学者と詩歌の世界 (6)

一石

今回は米国の物理学者ジョン・アーチボルト・ホイーラー(John Archibald Wheeler, 1911-2008)を取り上げる(参考資料1)。ホイーラーは1933年にジョンズ・ホプキンス大学を卒業、プリンストン大学の教授となった。第二次世界大戦の間、当時の多くの物理学者と同様、原爆開発のマンハッタン計画に参加した。20世紀物理学の巨人N・ボアと共同で「核分裂メカニズム」を発表(1933)。また晩年のA・アインシュタインに協力し、アインシュタインの夢であった統一理論の構築に取り組んだ。1950年代には、一般相対性理論は観測との接点がほとんどなかったため、物理学のなかでは研究者の少ない領域になっていた。そのなかで、「曲がった時空が物質の本質や宇宙の構造・成り立ちの理解にとって基礎となる」という信念の下、ホイーラーは一般相対性理論(後に量子重力理論)の研究に取り組み多くの業績を上げた。1960年代には、中性子星と重力崩壊の理論的分析を行ない、相対論的天体物理学のバイオニアとなった。量子重力理論では宇宙の波動関数を記述するホイーラー・ドウィット(Wheeler-DeWitt)方程式を導出した。

ホイーラーは理論物理の独創的な着想を「湯水の如く」生み続けた。また豊かな言語感覚に恵まれて、難解な時空の特異概念をワームホール(1957年、注1)や、ブラックホール(1967年、注2)とわかりやすく命名したことも知られている。

プリンストン大学の教授としてR・ファインマン(量子電磁力学、1965ノーベル物理学賞)、H・エヴェレット(多世界解釈)、K・ソーン(量子重力)など多くのすぐれた理論物理学者を育てた。弟子たちを囲んでの会食で次のような会話が合ったという(参考資料2)。

ホイーラー:「わが宇宙にどの法則が生じるか、ほかの宇宙ではどうなるかを、いったいどんな原理でできているのか?」ファインマン:「この人は頭がおかしいようなことをいう。(ソーンに向かって)君の世代の人達は知らないが、この人は昔からずっとおかしなことを言い続けてきたんだ。でも、僕は彼の学生だったときにわかったんだが、彼の突拍子もない考えを1つもつてきて、そこからタマネギの皮をむくように、異常さという皮をむいていくと、往々にしてその考えの中心に真理が見えてくるんだ。」一見「非常識な」ホイーラーの考えが、実は物理の核心をついていたことを表すエピソードである。

フェルミ賞(1968)、アインシュタインメダル(1988)、ウォルフ賞(1997)などを受賞。

研究活動の合間に詩を嗜んだ。以下に彼の詩2編を原文で紹介する。いずれも物理学の奥深い真理を洗練された短い言葉でさらりと表現している。「詩人物理学者(poetphysicist)」と呼ばれた所以である(参考資料3)。

注1…ワームホールとは、通常の時空に空いた虫食い穴のようなもので、時空内の離れた領域を繋ぐトンネルのこと。ワームホールの中には時空が極端に歪み、時空の距離がほとんど0になるため、離れた場所へ瞬時に移動することが可能。

注2…太陽の20倍を超える非常に重い星が、寿命がつき超新星爆発を起すときに、跡に残される中心核は自らの重力に耐えられずつぶれていく。この極限までつぶれた天体がブラックホールである。そこからは光さえも出てこれないことから、「黒い穴(black hole)」と呼ばれるのである。現在、20個を超えるブラックホールの候補が見つかっている。

○ FROM FALL TO FLOAT.

Venture far
To see the nearby
With new eyes.
Perceive yesterday's gravity,
Whether acting on man or mass,
As today's free float.
In the movement of the mass
Grasp the message of the medium:
"I, medium that grips you,
Man or mass,
And takes you how to move
Am not space.
I am Spacetime."

- 空間（3次元）と時間は別々に分離してあるのではなく、融合して4次元の「時空（Spacetime）」を形成している。その「時空」が歪むことにより重力が創出され、その中を物体が運動する…。

○ REVELATION OF SPACE

Oh event,
Sparkling grain of sand
On the fabric of existence,
Oh interval,
Gossamer tie
Between event and event,
You tear away the clouds
Of "absolute space" and "absolute time"
And reveal to us spacetime-
Spacetime as doorway,
Doorway during traveller,
To the enormity
Of space and time
Open to our visitation.

- 時空内にできた「ワームホール（虫食い穴）」のトンネル内では時空が極端に歪み、時空の離れた場所へ瞬時に移動する「どこでもドア」が可能となる…。

参考文献

- 1) [en.wikipedia.org/.../John_Archibald_Wheeler](http://en.wikipedia.org/wiki/John_Archibald_Wheeler)
- 2) ハリネーター：2010年の田舎 P 4
- 3) mybanyantree.wordpress.com/category/poetry-physics/page/2/

鎌田敬止という人（四十三）

「月虹」 鮫島 満

青磁社時代

〈高村光太郎との交流（5）〉

3 『花と実』他をめぐって

光太郎が昭和二十年四月の空襲によって東京の自宅、アトリエを焼失、五月に岩手県花巻町の宮沢清六方に疎開したことは前述したが、敵機の来襲が激しくなる中で、岩手と東京に遠く離れた光太郎と鎌田は戦争を忘れようとするかのように出版に打ち込んでいく。光太郎が昭和二十年七月四日付で鎌田に宛てた手紙がある。

六月二十九日のおてがミ昨日拝受しました。それによって東京の最近の様子がわかりありがたく存じました。（略）東北もだんだん敵襲におびやかされるやうになり、このところ連日サイレンがなります、三陸海岸、仙台市、秋田、青森などは大きな目標になつて居るやうです。（略）小生は其後病氣全快、予後順調に回復してゐます。今仕事場にあてる空家をさがさうとしてゐますが、中々むつかしいやうです。まだ彫刻にはかかつて居りません。読書や詩作にとどめてゐます。（略）御申越の詩集について左の通り略定めました。

○書名 詩集「花と実と」（或いは「花と実」） ○頁数 一二行

詰六〇頁程 ○篇数 三〇篇程 ○内容 草木の花、果実、蔬菜、穀類などを短章の詩にうたひたり。日本の山野に取材せるもの多し。右の通りですが御都合いかがでせうか。まとも次第詩稿お送りいたします。

この手紙は宮沢清六方から出したもので、まだ落ち着き場所も決まらない状況の中でありながら鎌田の積極的な企画に光太郎が前向きに応じていることがわかる。話の進行は極めて速く、既に企画予定届が作成されていることが次の速達によってわかる。

昨日速達便拝受、企画予定届正副二通へ書き込み捺印同封いたしました。八月初旬には原稿お送り出来るかと存じます。原稿の量について御希望がありましたらお知らせ下さい。内容紹介文は前便でお送りしました。「宮沢賢治選集」は丁度宮沢さんの家に居るので好都合ですからやませう。未発表の詩も発見されたので、それも入れませう。但し覚書風のを長く書く時間が今無いかと思はれます。極く簡単な紹介風のものならば早く出来るでせう。

（昭和二十年七月七日付、速達）

右の「企画予定届」は国の機関あるいは内務大臣への届であろう。類似の書類に「出版届」というものがあり、「文書図書ノ題号」「著作

ノ種類」「著作者ノ氏名及住所」「発行所ノ名称及所在地」「印刷所ノ名称及所在地」「発行年月日」等を記入の上、「右発行致候間出版法第三条ノ規定ニ準拠シ製本二部相添へ及届出候也」というものを内務大臣に提出することになっている。五月に花巻に疎開した光太郎がわずか二ヶ月余で原稿を送るというのだから、その集中した詩作態度は尋常ではない。いよいよ末期にかかっていた戦争のそのにおいすらしないことには注意しておいていいかもしれない。

右の手紙後半の「宮沢賢治選集」云々の件は、光太郎がさしあたって疎開したところが宮沢賢治の弟清六の家であることに着目した鎌田の新企画に応じようとしたものである。光太郎の七月十七日の日記に「鎌田氏より速達ハカキ」とあるのも「花と実」か「宮沢賢治選集」のどれかに関するものであろう。

さて、光太郎、鎌田ともにその刊行を急いでいた「花と実」はどうなったのか。光太郎が鎌田に宛てた速達はがきによると、「七月五日付の速達ハガキ拝見、北海道へ出張の途次お立寄の由、(略)何しろ旅行はご苦労の事と存じます」(昭和二十年七月九日付)とあり、二人の間を速達便がしきりに往復するばかりか、いよいよ鎌田が直接出向くということにもなっている。知人にも光太郎は、

近く『花と実』といふ詩集を青磁社から出版する事になつてゐますし、『宮沢賢治詩選集』をやはり青磁社からたのまれてゐます。賢治さんの実家に居る事として編纂には便利です。未発表の詩も発見さ

れたのでそれも入れます。小さい『道程』と同型の本になる筈です。

(樺沢ふみ子宛、昭和二十年七月十三日付)

目下『花と実』といふ詩集をまとめかけてゐます。又『宮沢賢治選集』ポケット版を編む支度をしております。青磁社で出版の筈です。

(真壁仁宛、昭和二十年七月二十四日付)

等と知らせている。

しかし事態は急変する。日本の敗戦が決まった後の光太郎の鎌田宛の書簡を掲げる。

速達おてがミ只今拝受、御無事で御元氣の事をおよろこび申し上げます。小生は八月十日の花巻町空襲にて再び罹りました。宮沢邸全焼でした。目下避難中、そのうち近村へ小屋を建てて住む事になつて居ります。そんな事で書きかけの原稿を焼失、又書き直すことになりましてので、完成少々遅れるでせうが出来次第お送りします。歌曲をつけたのが二篇あります。

(昭和二十年九月三日付)

これに対して鎌田は、丁重な見舞い状を書き、あわせて出版計画の実現に向けての意思を伝えている。これは次回紹介することにした。

萬葉一葉 (318)

今泉忠芳

磐姫その二十 灘波津の歌

・ ・ ・ 灘波津の歌は帝の御初なり。(おほさざさきの帝難波津にて、皇子ときこえける時、東宮をたがひに譲りて、位につきたまはで三年になりければ、王仁といふ人のいぶかり思ひて、よみてたてまつりける歌なり。『この花』はむめの花をいふなるべし。・ ・ ・

古今和歌集の仮名序の中の一節である。

古來、難波津の歌と安積山あさかさまの歌は

・ ・ ・ 歌の父母のようにてぞ、手習う人のはじめにもしける。・ ・ ・ と仮名序は述べている。

難波津の歌は仮名序の中に続いて出てくる。

・ ・ ・ そもそも、歌の様六つなり。唐の歌にも、かくぞあるべき。

その六種の一つには、そへ歌、おほさざさきの帝をそへたてまつる歌、難波津に咲くやこの花、冬ごもり今は春べと咲くやこの花

と云へるなるべし。・ ・ ・

古事記中つ巻・応神天皇の項おほさかのみことに就くいささつが述べられている。

応神天皇は大山守命と大雀命に帝位に関する問いかけをして、宇遲若郎子うぢわからつを次の帝位に指命した。大雀命はその命令に背かなかつた。

応神天皇が崩御された後、大山守命は天下を得ようとして、宇遲若郎子を殺すために軍を起した。大雀命が宇遲若郎子にそのことを知らせた。宇遲若郎子は大山守命が川を渡る時、川中に落ちるようにして大山守命を川に沈めた。

その後、大雀命と宇遲若郎子がたがい天下を譲り合つて長い日が

経つた。宇遲若郎子が早くなくなつたので、大雀命が天下を治めることになつた(古事記)。

難波津の歌は仁徳天皇の御代のはじめを寿いだ歌である。

法隆寺の五重の塔の内部の落書に「奈爾波津爾佐久也巳」とあり、難波津の歌とみられている。法隆寺の時代(670年に消失、8世紀までに再建)に広く難波津の歌が知られていたことがわかる。文武天皇(在位697〜707)の頃、歌の表記の一部が、一字一音表記になつたと思われ、その頃の落書と推定される。

平成20年5月22日、奈良市教育委員会が、紫香樂宮の跡(宮町遺跡)から出土した萬葉歌の書かれた木簡を発表した。

木簡の一面に「安積山の歌」、もう一つの面には「難波津の歌」が書かれていた。

難波津の歌は次のようである。

奈迹波ッ尔○久夜己能波○由己母

(○は解説不能)

聖武天皇は天平14年(742年)に紫雲宮造営を開始して天平17年(745)に平城京に戻つた。木簡は天平16年(744年)頃に書かれたものとなる。万葉集最後の歌が天平宝字3年(759年)であるから、その15年前のことである。

仁徳天皇即位の頃(400年)から伝承されてきた歌の一つが難波津の歌である。木簡が744年であるから、約340年の間、伝承されて来た歌が木簡に書かれたことになる。

古今和歌集序(眞名序)では難波津の歌に触れていない。

・ ・ ・ 至如難波津之什献天皇、富緒川之報太子或事関神異、或興入幽玄。・ ・ ・ とあるだけである。

「氷魚」のことから (114) 岡本八千代

はげしい茅花流しの風と雨……。ようやく今朝は小やみとなった。

第二十五回の蒲郡俊成短歌大会も盛大のうちに過ぎたが、まだその企画展は催されている。今年は何度も、その展示作品を観に行った。

——現在活躍中の歌人たち、故人となられた歌人たちのそれぞれの作品の著書、直筆の色紙や短冊等々が展示されているのだった。

すべての展示場が文化の宝物ばかりである。市民会館の狭い小さい一階のロビーではあったが、みなガラスのケースに収められていて、心のこもった、抒情を感じさせる展示であった。

今年も、特別に三河アララギ創設者（アララギ歌人）の御津磯夫先生（本名今泉忠男）の遺品作品（歌集、随筆集、色紙等々の一部）、また「三河アララギ」誌の去年の十二冊が扇のように展示されて、硝子ケースの中に美しく光っていた。おそらく観賞された人々も魅了されたことであろうと思う。

ここに、御津先生との交流のあった茂吉、文明、直筆の短冊の歌を書きとめておこう。

白雲は峰につきつつをやみなくうごくといへど中空には来ず

茂吉

海の上は伊良湖の野島前にありうみ吹く風の鳥にふく見ゆ

文明

たまきはるわが齢はしらず立ちかへりひとり声よぶ枯草の中

文明

また、御津先生の色紙絵の中の歌も。

(1) 金蒔絵にて花をちりばめし蓋のあり黒うるしの菓子器は円型にして

磯夫

(2) ふくよかなるをところをみなのかほをかさねたりならのかすがのつ
さいくとて

磯夫

(1) の絵は、紫色の丸い菓子器の蓋の上に唐草模様の小花が金色の顔彩で描かれている。

(2) の絵は、男と女の小さな顔が重ねられていて、奈良春日の鹿の角の細工物の描写。

御津先生は、絵描きにもなりたかったほどで、色紙の絵と歌の作品は何百枚もあるうちの二枚で、印象的であった。

さて、子規の「月の都」のことであるが、子規は「月の都」を「風流佛」の作家、幸田露伴に評してもらいたいと露伴の住む天王寺畔を訪ねたのであった。が、取り扱ってもらえなかった。……などとも言われているが、露伴は言った。（子規全集13巻・715頁）

「小説の中に俳句があったので、それで小説の方は物の良し悪しは兎に角、出して行くことが出来ない。俳句の方は面白かったものですから色々な話をしたものです。」と……。

ことのはスケッチ (379) 今泉由利

『金星』

オフィスでの通常が終わると、通常ではない事々をこなし：家に帰り着くのはいつも夜中。こんなことを長い間続けていた。

ある日「はやく家へ帰ろう」と思った。わが家への道は、まだ明るい空だったけれど三日月がでていた。そのちよつと下方に、大きく明るく、光を放つ星があった。

「金星！宵の明星！」。権現山を登る一歩一歩が金星に向かつてゆき、一歩一歩が金星に近付いてゆくような。他の星がまだ見えない「一番星」が「すごい」。

太陽系の、太陽より二番目の惑星金星。太陽を中心に、ほぼ同じ軌道と同じ方向に回っている。時により変るけれど、金星と私の距離は、今日は四千万キロメートル程だろうか。

把握出来る数字ではないけれど知ってほしい。

金星は、二酸化炭素の大气に覆われ、硫酸の微粒子からなる厚い雲がとりまき、その雲に太陽の光が強く反射して、こんなにもきれいに輝やいている。

清少納言の「枕草紙」第二五四段に、「星は、すばる、ひこほし、ゆふづつ、よばひ星、すこしをかし」

平安時代は、宵の明星を「夕星（ゆふづつ）」と呼んだ。天文学的数字で思えば平安時代も今も同じ。同じ金星を見ている。

仏教伝承にも金星は存在する。釈迦は「明けの明星」が輝やくのを見て、真理をみつけたといい、弘法太師、空海も、「明けの明星」が口中にとび込み、悟りを開いたと。

夜中には見る事が出来ず、宵の明星もすぐに沈んでしまい、明けの明星には起きていない自分の生活のスケジュールを変えよう。

太陽と月に続く三番目に明るい金星なのだから。常に気にしていかなくては勿体ない。

私の生涯、沢山沢山飛行機に乗ってきた。地上一万メートルの上空、ほんの少しでも星々に近付いたぶんだけ親しみを感じて。

☆一九七十年春、日本からアルゼンチンへと飛行中、私の窓いっぱい、「これは何？何が起つたのー」。大きな尾をひいて「ベネット彗星」だった。ひと晩を、ずっとずっと私の窓にいて、ずっとずっと一緒にいてくれた。

☆ニューヨークから飛びたち、すぐ夜になり座席を倒して寝る態勢を整え、気付くと窓に「南十字星」、私と平行する位置に、近く近く、少しづつ向きを横たえてゆく南十字星と一晩中一緒だった。朝になってゆく明るさに、淡くなりながら、そっと消えていってしまうのだった。☆アルゼンチンの大草原にいて、どの向きも地平線まで平たくて、丸い大地の真ん中に立っているのだった。

丸い台地の大きな空は、そのまま夕暮れて：星々が見えはじめ：星はどんどん増え：水があるとも思えないのに：螢がとびはじめ：螢はどんどん増え：流れ星みたい：星が螢かわからなくなりました。

そのなかに、「うさぎ？」野生の動物の耳が、一番大きく光った。

和菓子街道 (45)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

豊橋を後にして、下地、小坂井、国府を経て東海道35番目の宿場町、御油へ。この辺りは、子供の頃から慣れ親しんだ道。まさか、旅人としてここを歩くことになろうとは。

御油宿は、小さいながらも大名諸侯も多く利用した重要な宿場だった。広重の浮世絵に描かれたような「留女」による強引な客引きが有名で、熾烈な客争奪戦が繰り返されていたようだ。今ではそんな喧騒はなく、宿場の西外れから赤坂宿入口まで600メートルほど続く三河黒松の並木が往時の名残を感じさせてくれるだけ。この辺りのアスファルトを昔のように土に変えようという計画はその後、どうなったのだろうか。

ところで、御油宿の入口、姫街道との追分辺りで名物だった



という甘酒や白酒。どこかの店で復活させてくれるといいのだけれど。

弥次さん喜多さんが狐に化かされたの化かされないので大騒ぎをした御油の松並木。

お知らせ

▽編集会は、七月十一日(第二日曜日)に発行所にて行う。
▽八月号原稿は、七月一日(木)までに必着、郵送のこと。

歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四・〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰め(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

※毎月の原稿が期日までに到着しないため編集に支障をきたします。

尚、郵便の休配(日曜・祝日)を勘案して早目に送付ねがいます。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌の発送と共に送りますので、返信用封筒は不要です。

編集後記

▽桜につづき、初夏の魅力は何と云っても、瑞々しい新緑でしょう。

発行所の庭の桜も、牡丹も、花水木もいまは若葉のまつさかり。今日は早くも七月号の編集会で、もう一年の半分が過ぎようとしています。一日一日を大切に過ごしていきたいものです。

▽歌は、生活がよければ自然によい作ができるもので、その生活を通して、思うことを素直に、謙虚に歌うことが、作歌の本道であると、歌を学び始めたころ大先輩に言われたことを思い出します。

(山口)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分二万円、一ヶ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十二年六月二十五日印刷 第五十七巻 第七号
平成二十二年七月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘
平松 裕子・山口千恵子

発行人

今泉由利

発行所

三河アララギ会
三河アララギ発行所 千四四一・〇三二一

豊川市御津町御馬西三七
TEL (〇五三三)七五・二〇〇九

振替口座 〇〇八三〇・六一五六三二九

URL

E-mail yui88@cronos.ocn.ne.jp
Homepage <http://www.uocn.ne.jp/~yui/index.html>

印刷所

株式会社 桜創美